

だ い ず 通 信

令和6年 第2号

は種後1か月が経過し、雑草の草丈が大きくなってきました。
除草剤や中耕・培土作業は、大豆5葉期までに行うことで高い除草効果を得られます。
中耕・培土作業が除草剤の散布等により適切に雑草を抑えましょう。
6月末時点で、は種が5月末のほ場は5葉期、6月上旬のほ場は3葉期です。

1 生育状況

- 管内のは種作業は例年並の5月下旬から始まったが、5月末からの降雨により作業に遅れがみられた。
- 出芽は良好で、生育は順調である。

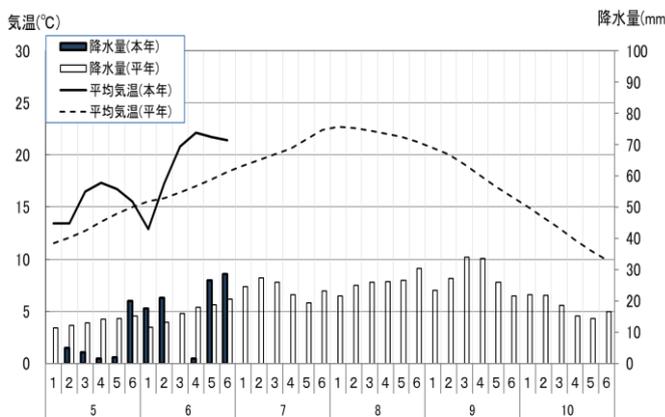


図-1 平均気温と降水量

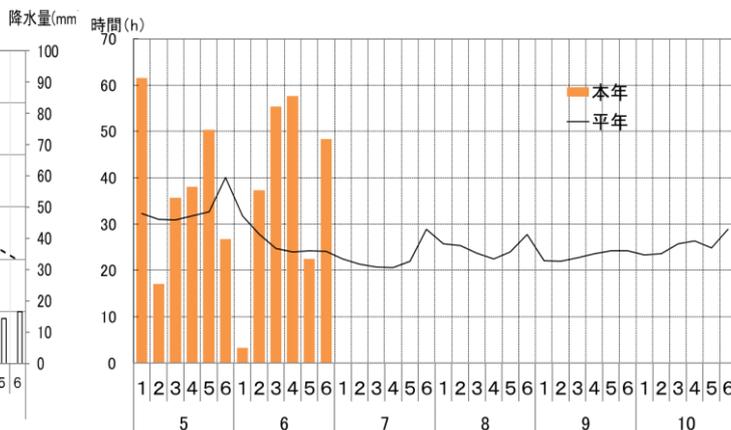


図-2 日照時間

2 中耕・培土作業

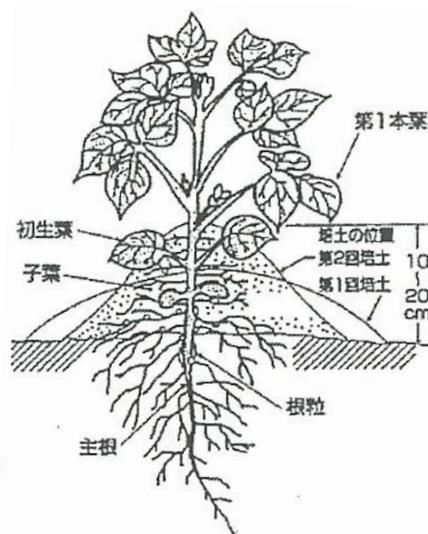
中耕・培土は、土壤表面を耕すことで生育初期の雑草を土中に埋め込み、高い除草効果がある。また、ほ場の表面排水を向上させ湿害や病害の発生を軽減するほか、発根を促進し耐倒伏性を向上させる効果がある。

(1) 中耕・培土作業の目安

- 1回目：本葉2～3葉期(は種後30日頃)
子葉が隠れるまで軽く土寄せする
- 2回目：本葉5～6葉期(1回目培土の2週間後頃)
初生葉が隠れるまで土寄せする

(2) 作業のポイント

- やむを得ず培土作業が1回しか行えない場合は、培土作業を除草剤散布におきかえ、確実に雑草を抑える。
- 開花期以降の作業は、大豆の根を傷つけ、落花や土壤病害の発生を助長するため、開花が始まる7月25日頃までに作業を完了する。



3 除草剤の散布

(1) 茎葉処理除草剤

- ・除草剤による雑草対策を行う場合は、雑草の生育初期に茎葉処理剤を散布する。
- ・大豆の生育が進み茎葉が株間や条間を覆い始めると、雑草にかかる薬液量が減少するため、十分な除草剤の効果を得られなくなる。大豆5葉期では株間にかかる除草剤の液量は半分程度まで減少するため、散布は早めに行うこと。
- ・同じ薬剤の連用は特定雑草が残る原因になるため、定期的に使用薬剤を変更する。

(参考) 大豆生育期に使用できる除草剤 (茎葉処理剤)

農薬名 (除草剤名)	適用雑草	使用時期	10aあたり 使用方法	使用方法	使用 回数
ポルトフロアブル		雑草生育期(イネ科雑草3~10葉期)(収穫30日前まで)	200~300ml (50~100%)	雑草茎葉 散布又は 全面散布	2回 以内
ナブ乳剤	一年生イネ科 雑草(スズメカ タビラを除く)	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(収穫30日前まで)	150~200ml (50~150%)		1回
		雑草生育期(イネ科雑草6~8葉期)(収穫30日前まで)	200ml (50~100%)		
		雑草生育期(イネ科雑草9~10葉期)(収穫30日前まで)	250~300ml (100~150%)		
大豆バサグラン液 剤(ナトリウム塩)	一年生雑草 (イネ科を除く)	大豆の2葉期~開花前(雑草の生育初期~6葉期) (収穫45日前まで)	100~150ml (100%)	1回	
アタックショット 乳剤	一年生広葉 雑草	大豆の本葉2葉期~開花前 (雑草生育期)(収穫45日前まで)	30~50ml (100%)	1回	

(2) 非選択性除草剤の畦間処理、株間処理

土壌処理除草剤や生育期処理除草剤だけで雑草を抑えきれない場合は、非選択性除草剤の利用も有効である。

- ・畦間処理、株間処理は、ブームスプレーヤーに吊り下げノズルを装着し、低い位置から非選択性除草剤を散布する方法であり、散布は雑草の草高が大豆より低い時期に行うため、雑草よりも大豆の生育が早まるような管理が必要。
- ・使用する際は、除草剤の登録内容を確認し、ドリフト軽減ノズルや飛散防止カバーを装着して大豆に薬液がかからないように注意する。

